

レ「女さん、クリスマスに何か予定ってある？」

女「え、ないけど。」

レ「じゃあうちでパーティーしましょうよ。料理は私が作りますから。」

女「でもあんたの部屋でやるんでしょ？狭くない？」

レ「そこは大丈夫。実は24日、うちの両親留守なんです。」ぽっ

女「じゃあ、良いわよ。」

レ「ほ、本当ですか！」

女「ただし、二人きりはだめよ。」

レ「え!？」

女「当たり前でしょ。あんたと二人きりになったら何されるかわからないじゃない。」

レ「そんな……聖夜に二人の愛の契りを交わしましょうよ～」

女「嫌よ。何が悲しゅうて初めてを同性に奉げなきゃならんの。」

レ「……」

女「(言い過ぎたかな?)別にあんたを嫌いって言ってる訳じゃないのよ?

ま、良いじゃない。

人を集めて騒いだら楽しいわよ？」

レ「始めてが乱交ってのはちょっと……」

女「ちゃうわ！」

12月24日

女「こっちよ。」

女友「へえ。こっちはあんまり来た事ないのよね。」

男友「ガチの家なんて知ってんの女だけだからな。頼りにしてるぜ。」

女「どうも。」

稲川「それにしても今日は寒いですね～」

女「ッて言うか稲川君、何で浴衣なの？」

稲川「やっぱり私といえばやっぱり浴衣で……ぶえっくし!!」

男友「うわ! 汚え!」

稲川「ズズッ 浴衣は私のトレードマークじゃないですか。」

女「そうなの？」

女友「さあ？」

女「あ、ここよ。」

ピンポ～ン

レ<はい?>

女「私よ。」

レ<はいはい。今鍵を開けますからね～>

ガチャ

レ「いらっしゃーい」

一同「お邪魔しまーす。」

レ「さあ上がって上がって。」

稲川「あたっかいですね～」

女友「ガチちゃんエプロン姿にあってるねー。」

男友「うん。ほんと。どっかの若奥様みたいだ。」

レ「照れます。///」

稲川「この話は知り合いの若奥様が経験したという話なんですけどね……」

男友「こんなところで怪談始めるなよ。」

レ「リビングに料理用意してありますよ。」

男友「いこいこ。」ばたばた

女友「うん。」とことこ

稲川「怖いな～と思ったんだけど……」ずりっずりっ

レ「若奥様って言われちゃいましたよ。」

女「ア～よかったね。」

レ「ご飯にする? お風呂にする? それともワ・タ・シ? な～んで!」

女「さいでっか。」
レ「もっと反応してくださいよ～」
友友稲「うおおおおおおおおお!!!!」
レ「どうしました?」
男友「SUGEEEEEEEEEEEE!!!!!!ケーキ、七面鳥、ローストビーフ、etc.....なんでもござれだ!」
女友「こ、これ全部あなたが作ったの!？」
レ「そうですよ。」
稲川「いるんだ!そこに!」
女友「すっご~い!」
レ「そんな大した事ないですよ。」
女友「いやすっごいよこれは。」
レ「とりあえず座って食べ始めましょう。」
稲川「うわあああああってなもんで.....」
女「あ.....美味しい。」
レ「美味しいですか?」
女「うん、おいしい!」
レ「この日のために一生懸命練習したんですよ。愛する人のために、ね?」
女「ぶっ!ごほごほっいきなり何を!」
レ「フフッ 本心ですよ。」
女「といいながらなぜ手を股間に伸ばす。」
レ「クリスマスだけにクリ」
女「いい加減にしなさい!」
レ「べふっ!!!」

レ「実はこんなものもあるんですよ～」
女「?」
レ「シャンパンです。」
女「いや、わたしら未成年ジャン。」
男友「いいジャン飲もうぜ!」
稲川「そうですねえ。みんな家も近いですし、飲んでも大丈夫なんじゃないですかねえ。」
レ「流石殿方は話がわかります。」
男友「はははは」
稲川「おだてられないほうが良いですよ。ナンてったって彼女はレぶごっ!？」
レ「すみませんつい麵棒が跳んでしまいました。」
稲川「こちらこそ.....」
女「ちょっと!」
レ「はい?」
女「彼知ってんの?」こそこそ
レ「はい。実は幼馴染なんです。」こそこそ
女「はじめて知った.....」こそこそ
レ「ちなみに彼も同性愛者なんですよ。」こそこそ
女「!？」
レ「今は男友君を狙ってるとか.....」
男友「何こそこそやってんだよ～」
女レ「いや、何でもありませんよ?」
男友「? 良いからはじめようぜ?」
レ「じゃあ、メリークリスマス!」
一同「メリークリスマス!!!」
~~~~~20分後~~~~~

レ「んく～～」  
男友「まさかこんなに酒に弱いとはな。」  
女「ほら、こんなとこで寝たら風邪引くわよ!」  
レ「にゅ～?」  
女「わたしこいつ部屋に送ってくるから。」  
女友「はいはい。」  
女「ほら、肩貸して。」

レ「はひはひ。」

女「ったく重いわね～」

レ「すみまへん～」

~~~~~1分後~~~~~

女「ほら、部屋についたわよ。」

レ「女ひゃん。」

女「ン？」

レ「わたしは、女ひゃんが、好きです。」

女「知ってる。知ってる。」

レ「どれくらい好きかって言うと～」

女「知ってるってのに。」

レ「クリスマスの料理は全部私が作りました。

女ひゃんに笑ってもらいたくて、おいしいって言ったもらいたくて、一生懸命練習したんです。」

女「へえ。」

レ「女ひゃんは笑ってくれました。美味しいって。嬉しかったあ。」

女「.....」

レ「私はこんなに好きなのに、女ひゃんは私を嫌いみたいなんです。」

女「私は別に.....」

レ「何度アタックしても答えてくれないし、おっぱい触ると起こるし、エッチさせてくれない

し.....」

女「そらな。」

レ「女ひゃん！」

女「きゃっ」

どたん

女(私、押し倒されて.....!?)

レ「女ひゃん.....」

(初めてなのに.....)

レ「愛してます.....」

女(でも.....こいつになら.....)

レ「.....クー」

女「？」

レ「クー スピー」

女「寝てる？」

レ「こー」

女「よかつ.....」

女友「何してんの？」

女「わ!？」

女友「結構大きな音してたけど。」

女「なんでもないの！」

女友「大丈夫？ 顔真っ赤よ？」

女「大丈夫！ こいつベッドにはこぶの手伝って。」

女友「あ、はいはい。」

女「.....なんか見た？」

女友「なんかって？」

女「いや、なんでもない。」

女友「よっと、これでOK」

女「ありがと。」

女友「それより、下で稲川君と男友が12時間耐久怪談ライブって盛り上がってるのよ。」

女「それより、私は料理をもっと食べたいな。」

女友「じゃあいこっか。」

女「うん」

女友「じゃあガチちゃんお休み～」

女「さっきは、ちょっともったいなかったかな？」ポソッ

女友「え？」

女「いや、なんでもない!! もどろ！」

稲川「ッていうお話だったんですね～」

女「うあ！」